

喉のない能管

高 桑 いづみ

能で用いる能管は、不思議な笛である。一見したところ、特に変わったように見えないが、不思議な音色と音律を奏でている。竹に指穴と歌口をあけて樺をまき、内側に漆や朱を塗布しただけのシンプルな構造と思われるが、中には材料の竹を割り、ひっくり返して外側が中になるように作った笛さえあるらしい。竹は外側が堅いので、しっかりと音色を求めてひっくり返して継ぎ合わせる、いわゆる七剥八継という工法である。

しかし、修理の際に解体したりX線で構造を調べない限り、どのような制法によるのか外見からでは判断できない。七剥八継にしても、精巧に接ぐので外見からは判断しにくい。古い能管では竹の表面に亀裂ができるので、それと見誤ってしまう可能性もあるのだ。そこで、東京文化財研究所の保存修復科学センターと笛師の田中敏長氏の協力を得て、今年から能管のX線撮影を開始した。まだ始まったばかりでデータがそろったわけではないが、従来とは異なる制法の笛を発見したので、

二三、紹介したい。

先に、不思議な音色を奏でると書いたが、その音色の秘密は、能管内部の細工に起因している。実際に制作するときは、一本の竹だけを用いるのではなく、頭部は太めの男竹を、指孔以降は女竹を、と姿の美しさや音色を考えて、複数の竹を接ぐことが多いらしい。

雅楽で用いる龍笛でもそうした制法をとることがあるのだが、能管は、さらに歌口と第一指孔の間に薄い竹の管(喉と呼んでいる)を挿入して、その部分だけ内径を狭めるような細工を行っている。内径をわずかに狭めただけでも音律は整わなくなるが、独特の鋭い音色を求めてこのような構造をとるようになったらしい。従来、歌口から第一指孔の間で竹材を切断し、喉を挿入して再びジョイントする制法がおこなわれてきた。江戸期に制作された能管はこうした工法を採っているのだが、X線で撮影したところ、この工法によらない能管が何点か見つかった。

最初に発見したのは、愛媛県今治市村上水

軍博物館が所蔵する横笛である。今治市といても瀬戸内海に浮かぶ島で、能島を中心に海賊として武勇をとどろかせた村上水軍家伝来の笛である。二十三代当主、村上景親(二五五八〜一六一〇)の初陣を祝して父の武吉が舞った際に吹いたと伝えがあり、博物館では二管展示していた。

管をのぞいただけでも、歌口と第一指孔間の内径が狭いのがわかる。ところがX線を撮ってみると、二管のうち一管には喉が認められたが、残りの一管には喉が写っていない。喉はないが、歌口付近と第一指孔の付近に切断した跡が写っており、その中間部分はたしかに内径が狭くなっている。つまり、歌口から第一指孔までの部分を、指孔以降より肉厚の竹材で接ぐことで、内径を狭めていたのである。喉を挿入せずに内径を狭める工法があるとは想像していなかったので、驚くべき発見であった。

実は、この横笛は少々破損していたので田中敏長氏が修理してくださったのだが、修理の際、過去に大幅な修理改造をして第一指孔から上部をさしかえた痕跡は確認できなかったとのことである。制作当初から、この部分の内径を狭める意図をもって別材を接いだ、と考えられる。

X線写真を見ると、ジョイント部分はいへんなめらかで、ミリ単位の繊細な技術を要するカーブになっている。こうした工法が他でも行われていたのか、それともこの笛独自

のものなのか、確認するために他の能管のX線調査も行ってみることにした。

現時点では、岩国市の吉川史料館、東京の永青文庫、名古屋の徳川美術館などで喉を挿入しない能管を発見している。

吉川史料館の笛は、吉川家十七代当主、広家(一五六一〜一六二五)秘蔵と伝えられている。広家は毛利元就の孫にあたる人物で、岩国藩の始祖である。実戦に長けていたが、「源氏物語」を愛好し、和歌を詠んだり茶事を好むなど教養もある人物だったらしい。同史料館には牛尾流とかかれた笛の伝書も伝存している。この能管は、樺の巻きようといいい、頭金(能管の頭部にはめこむ金属)の細工の細かさといいい(龍が実に細かく彫り込まれている)みごとな笛であるが、X線を撮った結果、喉を挿入せずに内径を狭めていることが判明した。村上水軍の笛とは内部構造が似ているだけでなく、指孔の形状が能管にしては少々縦長である点、指孔の周りの竹皮を向く処理の仕方、歌口や指孔の周りの朱がはげて黒ずんだ様子など、外観も似ている。村上水軍は小早川隆景ともつながりが深く、吉川家は小早川家と親戚関係である。しかも村上景親と吉川広家は、同時代に活躍している。文化圏の近さもあわせて考えると、こうした制法が桃山時代以前に行われていた可能性が強くなったのである。

また、徳川美術館の能管は藤田流七世清兵衛が「獅子田」作と極めを残す古管である。X

線写真では、歌口から第一指孔までの上側部分がひしゃげて写っている。切断箇所が写っていないので、どのような細工を行ったのか現時点では解明できないのだが、喉を挿入していないことは確実である。

喉の制法は、能管の発生に関わってくる。というのも、龍笛から能管が派生した、と提唱する研究者がいるからである。龍笛と能管の外観が似ていることから思いつかれた説だが、龍笛の歌口以下が破損したために外観上見えないように接いだのが元で能管が発生したのだろう、と九州工科大学(現九州大学)の安藤由典元教授は、述べておられる(「日本楽器の音響的特性」岩波講座「日本の音楽」アジアの音楽」第五巻所収など)。京都の笛制作者福田泰彦氏の意見を参考にされたようだが、田中敏長氏はこの考えに疑問を呈しておられる。構造上、歌口から第一指穴までの箇所はたいへん頑丈で、壊れにくいそうだ。修理の依頼は、歌口や指孔など、直接息や指のあたる部分がほとんどで、この箇所の修理依頼はないという。修理の必要のない箇所を、なぜあえて切断して内径を狭めるのか、そこにはもっと積極的な理由があったのではないかと筆者も考えている。

喉の挿入は、破損した箇所をつなぐイメージがして、修理を連想しやすい。だが、初めから別材を接ぐ工法は、修理と無関係に発想しうる。村上水軍の能管二管のうち、どちらが古作か簡単に判断をくだすのはむずかしい

が、江戸時代に制作された管の多くが喉を挿入している。別材で接ぐ制法がより古いとしたら、能管が龍笛の修理から派生した、という説は再考しなければなるまい。

龍笛は雅楽で用いる横笛だが、雅楽は合奏音楽である。ピッチが狂えば他の旋律楽器と合奏はできないから、管の長さや、指孔の位置はピッチにあわせて一定に保たれる。多少の音高差は唇の充て方で調節できるが、接ぎ方が悪くてピッチが合わなくなったら使いものにならない。

一方、打楽器と合奏する能管では、音高を第一としないため、現在では見た目のバランスで指孔をうがつ位置を決めている。現存する楽器を見る限りでは、龍笛と能管は全寸が少々異なるだけではなく、指孔の位置や指孔間の距離も微妙に異なっている。単に喉を挿入したり内径を狭めただけで龍笛が能管に変身するわけではない。と言いたいのだが、実は村上水軍や吉川史料館の笛は、指孔間の距離が完成後の能管というより龍笛に近い。指孔の形も楕円型で、龍笛に近い。別の意味で、龍笛から能管へ移行する過程を示唆しているかもしれないのである。

音の効果を追い求めた結果、内径を狭めるようになったのではないかと考えたのだからそれにはもう少し調査を重ねなければなるまい。この紙面では、「喉のない能管があった」という報告にとどめておく。

(東京文化財研究所無形文化遺産部)